

文藝と批評

第11巻 第7号

作家出版期における田山花袋の自己定位 小堀 洋 平 1

——『野試合』を読んで水蔭君に寄す』をめぐって——

「小説」と「事実」 西田 将 哉 11

——夏目漱石『坑夫』の「事実」性——

『門』における宗助の言語活動 解 璞 22

——参禅の意味を問ひ直す——

入会案内 編集後記

編集後記

二月に、大学院の仲間と都内某市の駅伝大会に出場した。数年前まで定期的にランニングはしていたものの、三十歳を前にして体力の衰えを感じ始めていたところでもあり、一区間五キロを完走できるか不安だった。何より、今の私は体重が九十キロ近くある。この重い体を五キロも引きずって走るのかと思うと、気が遠くなった。大会前に七回ほど練習をしたのだけれども、三十分を切ることでできないまま本番を迎えた。ところが、結果は二十六分四十六秒で、練習で一番早かったときよりも四分ほどタイムが縮んだ。練習は一人だ。しかし、本番では前後に何人もの走者がいる。前の走者に離されまい、後ろの走者に抜かされまいという気持ちが四分短縮につながったのだと思うが、何よりも次の仲間に襷を繋ぎなければならぬという気持ちが縮めた四分として現れたのではないか。

今号掲載の論文は三本で、いささか賑わいに乏しい。一本は田山花袋の出版期を論じたもの、二本は夏目漱石の小説に関する論文である。いずれも明治期のもので、明治から昭和にかけて幅広い論文が集まった前号に比べ、この点でも賑わいに乏しい。いつまでも編集を担当できるわけではないので、『文藝と批評』という襷を、可能なかぎり活気ある研究誌にして、若い人たちにつないでいければと思う。会費を納入している同人であれば誰でも投稿可能だ。多くの意欲的な論文の投稿を期待したい。次号の締切は八月十五日である。

(M・N)

ちょうど一年前、私はこの編集後記に尾上柴舟の歌を引きながら、ある高校に非常勤講師として勤めはじめた心境を綴ってみた。それから今日まで、私の周囲にも教壇に立ちながら研究を続ける人が数多くいて、たまに顔を合わせた折などには、互いの勤務先の話がしばしば出た。教えつつ学ぶ、という聞こえはいいけれども、やはりそれぞれに教えることの苦労は絶えなかった。進学校には進学校の、付属校には付属校の、そしていわゆる生活指導に力を入れなければならない学校にはその学校なりの、様々な困難が教員の前に横たわり、あるいはその双肩に圧しかかってきている。

しかし、——こういうことを言うとは甘い理想論だと反駁されるかも知れないけれども、私は教室から学んだことも決して少なくなかったと思っている。話を聞かぬ生徒、なかなかこちらの説明を呑み込めぬ生徒、そうした生徒達に対する語りかけの努力は、やがて読者をひきつけて読ませる論文、理路の整った分かりやすい論文を書く努力へと繋がってはいなかったか。——そういういながら、私はこの三月に職を転じた。今はただ、「いささかの機智より外に何もなき講義なりしをよく聞きしかな」という柴舟の歌を再び書きつけて、一年間の自身の授業をかえりみながら、かつての生徒達の顔を憶い出すばかりである。

(Y・K)

この号の編集事務は左記の者が担当しました。

(編集) 大川内夏樹、大貫俊彦、解璞、郭炯徳、佐々木伸、

塩野加織、崔恵秀、趙允珠、西田将哉、福岡大祐、

ブルナ・ルカーシユ、古矢篤史、三品秀徳、柳井貴士

(会計) 小堀洋平、橋本あゆみ

「文藝と批評」第十一巻第七号

(通巻百七号)

二〇一三年五月二十日 印刷

二〇一三年五月二十五日 発行

価額 一〇〇〇円

編集・発行者 文藝と批評の会

連絡先 東京都新宿区戸山一―二四―一

振替 早大文学部日文研究室内

印刷 株式会社研恒社

2013.5

『門』における宗助の言語活動

——参禅の意味を問ひ直す——

一 はじめに

『門』の多様な問題で最も不安定な位置にあるのが、宗助の参禅についての意味づけである。「鎌倉の禅寺へ行くなんか少し巫山戯てる^②」と批判した正宗白鳥の影響で、参禅の意味をめぐって後に議論が大きく分かれている。

ところで、白鳥は『門』に関して「何かの伏線らしい変な文句」「変な伏線」があると言いつつも、「宗助の人となりとしてさう不調和でないやうに仕組んでゐるなんか、この作者が脚色に抜け目のないことが察せられる」とも評価しているのである。これについては、例えば吉田熙生は以下のように指摘している。^③

『門』 この評語は一見矛盾しているようだが、「脚色」という言葉に付いた埃を払って読めば、白鳥は『門』を罪の物語ではなく、言語活動の衰弱の物語としてなら評価すると言っていると考えられているであろう。事実、宗助は休日に乗った電車の中で広告を三度読み返してその意味を理解し得たことに満足を覚えるが、

解

璞

書店では書物の題名を読むだけであり、坂井に対しては聞き役に甘んじ、禅寺に入ってはその言葉の意味すら分らなくなる。禅寺は宗助にとっては異界であり、「父母未生以前」の「本来の面目」という公案はもとより、宜道の言葉もまた了解不能の言葉に属している。

このように、吉田熙生の論は白鳥評に重点を置き、作品の分析を具体的に展開していない。また、宗助の言語活動の「衰弱」の物語かどうかについては保留をつける。だが、非常に重要な問題を提起したといえる。しかし、『門』における宗助の言語活動については、吉田氏の言及しか見られず、ほとんど無視されている。

後に詳しく述べるが、これまでは白鳥評の影響のもとで、参禅の伏線が具体的にどんなものかについてよく論じられてきた。しかし、参禅が宗助にとってどのような意味を持っているかについては、充分検討されたとはいえない。例えば『夏目漱石事典』^④にも「あらためて宗助の参禅の意味が問われなければならない」とあり、『門』論の課題の一つとなっている。

本稿では、正宗白鳥の批判ではなく、その評価から出発して宗助の言語活動に注目しつつ、『門』における参禅の意味を考えていきたい。それによって、参禅の新たな意味づけばかりでなく、白鳥評で言う「さう不調和でないやうに仕組んである」「抜け目のない」「門」の仕組みも明らかにするのである。本稿は主に『門』の始まりと終わりの場面に注目し、主人公宗助の言語活動のパターンや他者との関り方を考察する。それらの分析を通して、参禅前後の宗助の言説における差異を明らかにし、参禅の意味を問い直したい。

二、「半ば独り言」の日曜日

——文字言語に偏る宗助

『門』の冒頭では、宗助夫婦の間で「顔を見合わない」奇妙な会話が行われている。例えば御米が宗助に「近の字」を教える場面は次のようになっている。

「斯うでしやう」と云つた限、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「矢ッ張り左様か」と云つたが、「冗談でもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字は丸で気にならない様子で、「本当に好い御天気だわね」と半ば独り言の様に云ひながら、障子を開けた儘又裁縫を始めた。」

(一の一)

このように、「細君の顔も見」ない宗助と「半ば独り言」のよう

(二の一)

不図気が付いて見ると角に大きな雑誌屋があつて、其軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。梯子の様な細長い枠へ紙を張つたり、ペンキ塗の一枚板へ模様画見た様な色彩を施こしたりしてある。宗助はそれを一々読んだ。

(二の二)

広告を「丁寧」に三返程読み直した「一々読み終せた」「一々読んだ」というように、宗助は文字によって外の世界と関わりようとし、それと同時に声による関わりを避けているのである。

つまり、『門』の冒頭では「半ば独り言」のように話し、手紙を書き、刊行物を読む宗助の姿が反復されている。手紙と刊行物は、ともに音声言語による直接的な対話ではなく、文字言語による相手の顔が見えない「半ば独り言」のような他者との関わり方だといえる。

これらの箇所から、直接的な他者との関りを回避する宗助の姿勢が浮き彫りになる。このような宗助の姿勢は、後の章でより明確に語られている。例えば「新年の頭を拵えやう」として「髪結床」に行った宗助は次のように描かれている。

しばらく暖炉の傍で煙草を吹かして待つてゐる間に、宗助は自分と関係のない大きな世間の活動に否心なしに捲き込まれて、已を得ず年を越さなければならぬ人の如くに感じた。正月を眼の前へ控えた彼は、実際はといふ新らしい希望もないのに、徒らに周囲から誘はれて、何だかさざわした心持を抱いてゐたのである。

(十三の一)

に天気について話す御米の間で奇妙な会話が行われている。この会話が奇妙なのは、ここで「相会して話す」「辞林」金沢庄三郎編「三省堂書店（一九一一年四月）」という会話本来の意味を半ば失っているからである。つまり、これは対面して話し合う会話でもなく、完全な独り言でもない。むしろ「独り言」に近い「半ば独り言」なのである。

また、宗助は、叔母や安之助に対面して相談する必要がある時にも、「手紙」という形で済ませている。手紙とは、相手の顔が見えない（あるいは、相手と対面しないで済む）『門』の冒頭の会話に類似した、「半ば独り言」のような他者との関わり方である。このような他者との関り方は、御米や小六に繰り返し文句を言われる箇所に裏付けられる。例えば、御米は「手紙ぢや駄目よ、行つて能く話をして来なくつちや」（二の二）と言い、小六も「散歩に出る閑があるなら、手紙の代りに自分で足を運んで呉れたらよささうなものだと思ふと余り好い心持でもなかつた」（一の三）と不満を持っている。それにもかかわらず、宗助は面談より手紙のほうを選んでいく。

そればかりではない。宗助は外に出ても、人と直接話すのではなく、広告などの刊行物を読んでいる。

宗助は約十分も掛かつて凡ての広告を丁寧」に三返程読み直した。別に行つて見やうと思ふものも、買つて見たいと思ふものも無かつたが、たゞ是等の広告が判然と自分の頭に映つて、さうして夫を一々読み終せた時間のあつた事と、それを悉く理解し得たと云ふ心の余裕が、宗助には少なからぬ満足を与へた。

「否応なしに」「やむを得ず」「周囲から誘はれて」という記述からも窺えるように、他者との関りの中で、宗助はいつも受動的で逃避的であつた。手紙や刊行物などの文字言語を用い、他者と同調することを拒否し、直接的な面談を回避した宗助の姿勢は、繰り返し強調されているのである。

三、「驚の問答」の日曜日

——「まだ充分に舌が回」らない宗助

『門』の結末の日曜日について、これまでは例えば「同じ日曜日の同じ縁側という設定に見られる、時間と空間の循環構造」というように、ほとんど冒頭の日曜日の反復だと解釈されてきた。しかし、宗助夫婦の会話や宗助自身の言説に注目すると、類似した二つの日曜日にもいくつかの相違点が見られる。

まず第一に、ほぼ同じように見える冒頭と結末の天気に関する会話についてである。冒頭では「おい、好い天気だな」「本当に好い御天気だわね」（一の二）という宗助と御米の会話は、単に話しかけるためのものだが、それに対し、結末の会話にはこれまでの出来事に対する宗助と御米の各自の複雑な気持ちが含まれている。『門』の結末では、宗助夫婦の会話が次のように描かれている。

宗助は家へ帰つて御米に此驚の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、「本当に有難いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ々しい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪り

ながら、

「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、
鉢を動かしてゐた。(二十三)

「本当に有難いわね。漸くの事春になつて」と言つた御米は「春」
だけでなく、小六事件が片付いたことをも指していると考えられる。
それに対し、「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答えた宗助は「冬」
だけでなく、安井のことをも暗示している。特に、宗助がこれまで
語れなかった気持ち言葉を言葉にして、暗示的に御米に伝えることがで
きたといえる。つまり、冒頭のときがちな「半ば独り言」のよう
な会話に対し、結末の会話は宗助の最後の答えで終わつても、夫婦
の対話の続く可能性が残っているのである。

第二に、同じことに対する宗助と御米の対照的な見方に関してで
ある。これまでは同じことに対して二人の見方が異なつても、相手
と話し合うことはなかった。それに対し、結末では二人の異なる見
方が声となり、会話を語られるようになった。

同じことに対する二人の対照的な見方は、主に次の三点に現れて
いる。まずは叔母が若くみえることについて、宗助は「若い筈だ、
あの年になる迄、子供をたつた一人しか生まないんだから」(五の
一)と説明している。それに対し、御米は「叔母は、たつた一人の
男の子を生んで、その男の子が順当に育つて、立派な学士になつた
ればこそ」豊かなのだとひとり考えている。また、泥棒事件にお
いて「御米は自分の耳と頭の縫な事を夫に誇つた。宗助は耳と頭の
縫かでない事を幸福とした」(七の五)と地の文で語られているよ
うに、同じ「耳と頭の縫」さについて、二人は対照的な考え方をし

晴れ／＼しい眉を張つた。

(二十三)

ここで宗助は、驚の「鳴声」を彼自身の声に、驚の「舌」を自分
の舌に重ねて考えているようだ。そうでなければ、御米に「此驚の
問答を繰返して聞かせ」る必要はないのである。また、「宗助と
安之助が、不足の所を分担する事が出来たらと小六に云つて聞かし
たのは、宗助自身であつた。」(二十三)とあるように、参禅から帰つ
てきた宗助は、それ以前より積極的関係を築くようになった。参禅
後の宗助は手紙に頼らずに、安之助と面談することになる。そして、
費用の「分担」を積極的に提案したのが「宗助自身であつた」こと
も強調されている。

福井慎二は、「門」における「時間の連続性を前提とする近代の
枠組みから抜け出た」「超時間性」を指摘している。しかし、ここ
には、明確な非連続な「超時間性」よりもむしろ連続的にみえつ
つ、停止と再生を繰り返すことによって、更新しつづける宗助の言
語活動があるのではないか。冒頭と結末の日曜日を比較する際に、
一見反復しているような時間のなかにも、冒頭の手紙などの文字言
語から結末の会話などの音声言語への変化が見い出せる。これこそ、
宗助の言語活動が回復する兆しなのである。

ただし、これは完全な回復とは言えない。なぜならば「しかしま
たじき冬になるよ」という宗助の話のように、寒い「冬」の後にやっ
てきた宗助一家の「春」(回復)も長く続かない可能性が暗示され
ているからだ。また、ここでの回復はあくまでも「まだ充分に舌が
回」らない驚のように、回復の兆しが現れはじめるところで、物語
が幕を閉じたからである。

ている。さらに、安井との再会を恐れ、歩いて帰宅した宗助の言い
訳について「御米は可笑しさうに笑つた。宗助は寧ろ苦しかった。」
(十七の六)という箇所にも、二人の対照的な見方が認められる。

確かに結末の日曜日にも、同じ季節節に対する宗助と御米の正反對
な見方が見られる。しかし、これまでの夫婦の対立は地の文で語ら
れているのに対し、結末になって、「本当に有難いわね。漸くの事
春になつて」と「うん、然し又ぢき冬になるよ」とあるように、は
じめて会話文で語られるようになったのである。つまり、これまで
の潜在した対立について、結末になってはじめて二人は会話で話し
合うようになったといえる。

第三に、冒頭の場面と最も明らかに異なるのは、結末で「驚の問
答」が話題になったことである。これについて「門」では以下のよ
うに書かれている。

ある日曜の午宗助は久し振りに、四日目の垢を流すため横町
の洗濯に行つたら、五十許の頭を刺つた男と、三十代の商人ら
しい男が、漸く春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換
はしてゐた。若い方が、今朝始めて驚の鳴声を聞いたと話すと、
坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答へて
ゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「え、まだ充分に舌が回りません」

宗助は家へ帰つて御米に此驚の問答を繰返して聞かせた。
御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、
「本当に有難いわね。漸くの事春になつて」と云つて、

四、参禅という転換点

前の二節では「門」の最初と最後にある二つの日曜日について考
察し、文字から音声へという宗助の変化を明らかにした。ここでは、
この変化の転換点である参禅に焦点を当て、参禅を通して宗助がな
にを手に入れたのかについて考えてみたい。

前述のように、従来、参禅に意味があるか否かについて、見解が
分かれている。例えば、前田愛は「御米がほんの一言で宗助をやす
やすと日常的世界に迎え入れてしまうこの場面の意味を正當にうけ
とめるかぎり、参禅をめぐってことごとく論じられてきたこ
れまでの言説は、何かむなししい観念の遊戯だったように思われてく
る」と述べ、参禅に意味がないと述べている。

それに対し、参禅に意味があるとする見解も数多くある。例えば、
米田利昭は「そういう宗助はお米との共同の時間を回復する中で、
表面は元の宗助でも、内実はそれだけ複雑に、一層道德的になつて
いくと思われ」というように宗助の道德性に注目している。そし
て、石原千秋は「冒頭の姿勢ではなく、参禅時の崖下の「横穴」で
のポーズを宗助の身体は覚えていた。それは、決して「覆らな」い
「達磨」のように、〈家〉の不在に耐えぬく身体に焦点を当てている。
と述べ「〈家〉の不在に耐えぬく」宗助の身体に焦点を当てている。
また、小森陽一は「鎌倉で宗助が唯一深く自覚したことは、自分が
「無力無能な赤子である」ことだとも述べている。

では、宗助の言語活動に注目するならば、参禅からどのような意
味を読み取れるのだろうか。これを考える際に、宜道の助言に関す
る次の一節が重要な手がかりとなる。

宗助は腹の中で、昨夕の様に当途もない考に耽つて、脳を疲らすより、一層其道の書物でも借りて読む方が、要領を得る捷徑ではなからうかと思ひ付いた。宜道にさう云ふと、宜道は一つもなく宗助の考を排斥した。

「書物を読むのは極悪う御座います。有体に云ふと、読書程修業の妨になるものは無い様です。(中略)もし強いて何か御読みになりたければ、禪関策進といふ様な、人の勇気を鼓舞したり激励したりするものが宜しう御座います。それだつて、只刺戟の方便として読む文で、道其物とは無関係です」

(十八の六)

「脳を疲らすより」「捷徑」としての「書物」を読もうとし、文字言語に頼った宗助の考え方は、宜道によって「一つもなく」「排斥」される。これについて大野淳一は、「禪は時に流俗の中にあつて嘲弄され、時に山門の中にあつて流俗を峻拒する」と解説している。しかし、ここで看過できないのは、宗助などの初心者にとって「修業の妨」は、禪の「講義」に当たる「提唱」ではなく、禪の「書物」だったということである。

そして、宜道が書物を読むのが良くないと言う理由は次のようになっている。

私共でも、斯して碧巖杯を読みますが、自分の程度以上の所になると、丸で見当が付きません。それを好加減に揣摩する癖がつくと、それが坐する時の妨になつて、自分以上の境界を預期して見たり、悟を待ち受けて見たり、充分突込んで行くべき

所に頓挫が出来ます。大變毒になりますから、御止しになつた方が可いでせう。

ここで宜道の理由は主に二つある。まず一つ目は「自分の程度以上」の書物を読んでも判らないからということだ。書物からの影響というのは、あらかじめ影響される側に「たとえ潜在的であつても」あつたものと呼び出し、または呼び覚ますことに他ならない。「単に頭から割り出した、恰も画にかいた餅の様な代物」(十九の二)という公案に対する宗助の回答のように、宗助自身のなかに「餅」がなければ、書物を読んでも、本物を獲得できず、「画にかいた」「代物」しか持ち出せない。

これは冒頭の「近來の近の字」をめぐる宗助夫婦の会話とも関っている。文字に迷った宗助は「何うも字と云ふものは不思議だよ」というように、文字表記本来の恣意性に気付く。ここで宗助は、目の前にある文字表記だけでなく、目に見えない、文字の意味内容を規定する社会共通の約束にも違和感を持つていると考えられる。また、「近來の近」、「今日の今」というように、「縁の遠い」文字ではなく、最も身近なものに宗助が戸惑っているのである。つまり、宗助は自分自身のなかにあるものしか書物から読み取れず、自分自身のなかにないものは文字にも見出せない。文字言語は、鏡のように宗助自身の考えを反射させ、宗助を自分自身の抱えた問題の無限循環に陥らせるのだ。だからこそ、書物は「道其物とは無関係」だという宜道の言葉は、宗助にとって大きな意味を持つてくるのである。書物を読まないもう一つの理由は、「好加減に揣摩する」癖がついたら、自分以上のものを「予期」したり、充分突込んで行くべき

所に「頓挫」するからだ。普段修行しなければ、あるいは実際に体験しなければ悟りえないことが存在している。これに対し、書物から受けた先入観で「好加減に」推測し、無理に対応させると、逆に書物という文字言語は自分と対象の間の隔たりとなり、「妨」となるのだ。これが文字言語に頼ってきた宗助に対する第一の助言である。

「道は近きにあり、却つて之を遠きに求む」(二十一の一)という宜道の第二の助言も、書物をやめようという第一の助言と無関係ではない。宗助にとって一見近道(捷徑)に見える書物も、実はまわり道(遠き)道だったのである。実際、山に入ってから「始めて一人遠くに来た心持がした」時に、宗助は「却つて町にあるときよりも動揺した」(十八の三)とある。また、「彼は直截に生活の葛藤を切り払ふ積りで、却つて迂濶に山の中へ迷ひ込んだ愚物であつた」(二十一の一)ともある。このように、参禅時において、宗助自身もまわり道(宜道のいう「遠き」道)をしたことに気付いたのではないだろうか。

さらに「父母未生以前の本来の面目」という公案は、「遠き」道ではなく、最も宗助自身に近い「有の儘」の自己、そして「赤子」状態よりも早い起源に居ることを要請している。その起源には、他者と間接的に関わる手段である文字言語だけでなく、一般の他者も存在しない。そればかりでない。「父母未生以前の本来の面目」とは、父母という最初の他者にさえ影響されない自己なのだと見える。この父母にさえ左右できない自己という問題は宗助の「現在」と「縁の遠い」ものではなく、むしろ、安井や御米との関わり方、子供の喪失などこれまで宗助が経験してきた苦痛と深く関連したもので

だといえる。宗助にとって友人・夫婦・親子の間で分かち合えない自己がいると考えられる。

例えば、互いに理由を告げずに、禪師の門と易者の門を潜った宗助と御米は、共に罪を犯したにも関わらず、完全に同じ罪を犯したとはいえない。そのため、宗助にとつても御米にとつても「共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかった」(十三の七)のである。さらに、子供の葬儀にも、親という他者さえ関与できない自己が存在している。宗助の亡児は「戒名を持つてゐた。けれども俗名は両親といへども知らなかつた」(十三の七)のだ。このように、共に人生を送る夫婦の間ばかりでなく、自ら命を与えた子供にさえ、完全に分かち合えない自己がいるのである。だからこそ、参禅の公案は、宗助に他者に影響されない「赤子」状態、さらに、自らの命の根拠であり最初の他者でもある父母にさえ影響されない自己に戻ることを要請したのである。

「門」と同年に書かれた『思ひ出す事など』にも類似した考え方が窺える。例えば「十七」では、アンドリュ・ラング「夢と幽霊」、フランマリオン「靈妙なる心力」およびオリバー・ロッヂ「死後の生」が言及された後、次の一節が書かれている。

大いなるものは小さいものを含んで、其小さいものに気が付いてゐるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己等の寄り集つて拵えてゐる全部に対しては風馬牛の如く無頓着であるとは、ゼームスが意識の内容を解き放したり、又結び合わせたたりして得た結論である。それと同じく、個人全体の意識も亦より大いなる意識の中に含まれながら、しかも其存

在を自覚せずに、孤立する如くに考へてゐるのだらうとは、彼が此類推より下し来るスピリチズムに都合よき仮定である。

ここで漱石はジェームズの意識に関する議論に言及しているが、特に「含まれた小さいものは自分の存在を知るばかりで」「自分」を含む「大いなるもの」に対しては「無頓着である」ことに注目している。また意識に関しても、個人の意識は「大いなる意識の中に含まれながら、しかも其存在を自覚」しないと要約している。「門」の参禅する宗助についても同じことが言えるであろう。「父母未生前の本来の面目」という生前の自己も、死後存在し続ける自己と同様に、生死に関りなく存在し続けるものなのだとはいえる。そればかりではなく、父母など自己を根拠づける他者とも関係なく存在する「大いなる」自己なのである。宜道の助言に戻ると、宗助が文字言語に偏重した他者との関わり方（「遠き」道）を放棄してはじめて「有の儘」（十八の六）の自己を発見する可能性が見えてくると考えられる。

参禅を通して、宗助は一度文字言語を放棄することによって、新たな言語活動を再生する機会を獲得したといえる。今までのような言語活動が一時完全に停止し、一度「赤子」（十八の六）の起源に戻って、はじめて新たな言語再生の契機を手に入れることができる。だからこそ、参禅後の日曜日に宗助は「驚の問答」を繰り返し御米に語り、前から回避した面談も積極的に行うようになったのである。

五. おわりに

本稿では、正宗白鳥の批判に基づく従来の観点でなく、正宗白鳥

も評価した宗助の言語活動に関する物語という観点から、参禅の意味を考察してきた。参禅前の宗助としては、手紙や刊行物などの文字言語が、他者と関わる主要手段であり、直接的な対話を回避する傾向がみられる。参禅後の宗助は、「鳴きははじめ」た驚の声に自身自身の声を重ね、それまで回避してきた問題を直接的な面談による解決を試みるようになった。従って、「門」における参禅の意味は、前述した先行研究のいう「道徳」や身体的な変化だけではなく、音声言語によって直接的な関係性を築き上げることにあるといえる。「門」の二年前に書かれた『夢十夜』の「第一夜」と「第三夜」にも、他者との関わり方や「父母未生前」の自己に関するモチーフが見られる。前者は「百年」待つ約束なのに対し、後者は「百年」後に復讐される夢である。出来事の性質が異なるものの、二作ともに「百年前」の自己、すなわち「父母」を根拠とする起源さえ超えた自己を扱った作品だといえる。

また、前述した「思ひ出す事など」（十九）においても、「世の中」「自然」「社会」「朋友」「妻子」そして「自分」さえ「自分」の「敵」になりつつあると書かれている。ここでの自己は他者に左右されない（「父母未生前」の自己）とともに、どんなに親しい人にも理解できない（他者と共有できない自己）という両面性を持っている。「門」における参禅も、このような普段関わる他者と、他者に関わる手段である文字言語を一度放棄することによって、普段意識しない自己という潜在的な他者に目を向け、言語活動を再生する契機だと言える。この観点からすると「門」の最初と最後にある「半ば独り言」と「驚の問答」は、参禅と響きあう「抜け目のない」仕組みだといえるであろう。

繰り返すが、参禅を通して宗助は文字言語に頼った他者との関わり方を放棄することによって、音声言語で他者と対話する契機を獲得するようになったといえる。「門」は吉田熙生の言う宗助の言語活動が衰弱する物語ではない。たしかに、「門」の前半に宗助の言語活動の衰弱は認められる。しかし、後半における宗助の言語活動の回復をも見過ごしてはならない。また、宗助の回復する兆しが現れはじめたところで「門」の物語は幕を閉じたが、他者との関わり方や自己という他者をめぐるモチーフは後の作品にも続いているのである。

注(1) 一九一〇年（明治四十三年）三月一日〜六月十二日の『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』（全一〇四回）に連載され、一九一一年（明治四十四年）一月に春陽堂によって刊行された。

(2) 『夏目漱石論』（中央公論）一九一八年六月。

(3) 「門」あるいは白鳥の「門」評を読む『夏目漱石事典』学燈社一九九九年五月。その後にも「白鳥にしてみれば、『命根何処は、窮蹙不可知』という詩句はそういう情態にこそふさわしい、と言いたかったのかも知れない。だがここから先はどうやら別のお話あるいは「物語」となるようである」と続いており「思ひ出す事など」の漢詩との関連が指摘されている。

(4) 勉誠出版、二〇〇〇年七月。

(5) 片岡豊「和合同様」のための〈男〉の条件——夏目漱石「門」の宗助（『作新国文』第十一号、一九九九年度、二〇〇〇年一月発行）に「冒頭の対話を眺めてみると、そこには双方の存在をあるがままに受け入れている男／女の〈理想的な愛の形〉と呼ぶべき姿をさしたって見届けられるのではないか。顔を向け合わない、あるいはまなざしを交し合わないという対話のありようも、（いま・ここ）にあるそれぞれの存在自体が閉ざされた空間の中で睦み合っているの

あれば、その必要もないのだ」とあり、「顔を向け合わない」対話を「閉ざされた空間の中で睦み合っている」としているが、本稿では、「半ば独り言」という御米の姿勢に注目し、必ずしも「睦み合っている」とはいえないと指摘しておきたい。

(6) 「門」の冒頭に宗助が「雑誌」を読んだという興味深い記述もあるが、宗助と雑誌については別稿を用意している。

(7) 例えば小平武「漱石の季節——「門」の循環する時間」（『講座夏目漱石 第四巻』有斐閣、一九八二年二月）、尹相仁「すまいの風景」（『世紀末と漱石』岩波書店、一九九四年二月）に二つの日曜日の類似性についての指摘がある。

(8) 小森陽一「漱石深読 第八回「門」」（『すばる』二〇〇九年八月）にも「驚の問答」に関する言及があるが、冒頭の「独り言」との対比の中で考察する本稿の視点とは異なる。

(9) 石原千秋「〈家〉の不在——「門」論」（『日本の文学』第八集、一九九〇年十二月）にも、「うん、思ひ切つて行つて来よう」と答えた宗助の行動に関する言及がある。

(10) 「門」の幾何学模様——時間意識の構造をめぐる語り手・作者の分裂（『漱石研究』第十七号、二〇〇四年十一月）に「新しい時間とは平凡な日常（螺旋的時間）に復帰することとも異なり、円・直線・螺旋のいずれとも定められない新しい形の点で超時間的と言え、それが事件にとらわれないことにはかならない。（中略）本稿で言う超時間的とは、時間の連続性を前提とする近代の枠組みから抜け出て、時間の不連続性に立脚することだと考えることも可能だ」とある。本稿では、時間の問題ではなく、言語活動の変化に注目している。

(11) 「山の手の奥」（『都市空間のなかなの文学』筑摩書房、一九八二年十二月）。また、赤井恵子「門」論序説（『近代文学試論』二十一号、一九八三年十二月）にも「この十日間の参禅行は、彼に殆んど何もたらさない。東京の家では、あの不安定な空間で、元通りに、危険をはらんだ日常の時間がまた一日一日と流れていくだけである」とある。

(12) 「異空間へ——「門」」（『わたしの漱石』勁草書房、一九九〇年八月）。

(13) 石原千秋前掲論。

(14) 小森陽一前掲論。

(15) 「漱石と禪——近代の彼岸」(國文学 解釈と鑑賞)二〇〇九年二月。

(16) これに関するエピソードは、「色氣を去れよ」(小川煙村・倉光空喝 共編『名士禪』柳枝軒書店 一九一〇年四月、『漱石全集』第二十五卷)に記されている。「或日宗活さんは龜の下を焚きつけてゐながら手に一冊の本を持って読んでゐた。「何といふ本ですか」「『碧巖集』、けれど本は余り読むものぢやありません、幾等読んだつて自分の修行程度しか判らぬから」此の一句は実に大切な事である。平常の修行さへ十分にやると、如何なる人物にもなれる(以下略)」とある。

(17) 「門」(一)には「幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちゃんと書いて見て、ぢつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る」とある。

(18) 同じく安井を裏切つたといつても、友人に対する感情と恋人に対する感情が異なる。そして同じく子供を失つても、身体の苦痛のない宗助の気持ちと、妊娠という身体の苦痛を何度も体験した御米の気持ちの重みも異なっている。

(19) 「思はざる徳義上の苛責を人知れずに受けた。しかも其苛責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。」(門)十三の七)とある。

(20) 「宗助は亡児のために、小さい柩を拵らえて、人の眼に立たない葬儀を営んだ。しかる後、又死んだものために小さな位牌を作つた。位牌には黒い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つてゐた。けれども俗名は両親といへども知らなかつた。」(門)十三の七)とある。

(21) ここで「他者」は、安井のような周囲の他人から、書物のような世間共通の約束である言語までを指している。

(22) 一九一〇年十月二十九日〜一九一一年四月十三日、『東京朝日新聞』に連載され、単行本『切抜帖より』(春陽堂 一九一二年八月)に収録された。

(23) 前述のように音声言語も物語の初めからほぼ喪失したため、ここでは宗助は言語活動を一旦停止させたといえる。

(24) 一九〇八年七月二十五日〜八月五日、『東京朝日新聞』・『大阪朝日新聞』(『大阪朝日新聞』には七月二十六日から連載された)。

*本稿の引用は岩波版『漱石全集』第六巻第二次刊行(二〇〇二年)に拠る。傍点や傍線は、引用者に拠るものである。なお、旧字は適宜新字に改め、ルビも一部を除いて省略した。

(かい・はく)

「門」(一)の「幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちゃんと書いて見て、ぢつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る」とある。

「同じく安井を裏切つたといつても、友人に対する感情と恋人に対する感情が異なる。そして同じく子供を失つても、身体の苦痛のない宗助の気持ちと、妊娠という身体の苦痛を何度も体験した御米の気持ちの重みも異なっている。」

「思はざる徳義上の苛責を人知れずに受けた。しかも其苛責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。」(門)十三の七)とある。

「宗助は亡児のために、小さい柩を拵らえて、人の眼に立たない葬儀を営んだ。しかる後、又死んだものために小さな位牌を作つた。位牌には黒い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つてゐた。けれども俗名は両親といへども知らなかつた。」(門)十三の七)とある。